科学の方法と討論の自由
――ミル『論理学体系』と『自由論』における可謬性の位置づけ――

鈴木英仁（京都大学）

ジョン・スチュアート・ミルが『論理学体系』第三巻および第四巻で提示した認識論・科学方法論は、しばしば帰納主義(inductivism)的なそれと形容される。そこでは、いわゆる「ミルの方法」に代表される厳密な推論の方法によって、自然法則についての「あらゆる実践的目的にとって完全な(complete)」知識を得ることができると主張される。他方、ミルの晩年の著作である『自由論』第二章に目を向けると、『論理学体系』のそれとは緊張関係に立つようにも思われる次のような認識論的前提が見出される。『自由論』のミルによれば、個人の意見も時代の意見もまったく「可謬的(fallible)」であり、誰も自身の信念が真であると確信することは決してできない。それゆえ、思想と討論の絶対的な自由を保障することが人類の利益にとって必要不可欠であるとされる。

こうした一見した緊張に対して、一部の解釈者たちは、『自由論』第二章の意見の自由についての議論が適用される領域を限定するという方針を採用してきた。彼らによれば、人間の信念の可謬性と討論の自由、批判的議論の重要性が主張されるのは、あくまで道徳・政治・宗教といった複雑な実践的主題についてのみであり、『論理学体系』第三巻が扱う自然科学の探究は『自由論』第二章の射程からは外れているのだという(Rees, J. “The Thesis of the Two Mills.” *Political Studies* 25, no. 3 (1977): 369–82)。あるいは、自然科学の領域において討論の自由が要請されるのは、専門家による科学的探求のためではなく、あくまで非専門家の証言的知識の十全な獲得の手段としてのことに過ぎないと解釈される場合もある(Wright, A. T. “Mill’s Social Epistemic Rationale for the Freedom to Dispute Scientific Knowledge: Why We Must Put Up with Flat-Earthers.” *Philosophers’ Imprint* 23, no. 14 (2021): 1–14)。しかしながら、このような議論のスコープの制限を積極的に根拠づけるミルのテキストは見出されないし、それどころか、決して数が多いとは言えないものの『自由論』には自然科学についての言及もたしかに存在することを考えると、上述の解釈には不満が残る。

本発表の目的は、『論理学体系』と『自由論』の間に一見して見出される緊張を上の解釈とは別の仕方で解きほぐすことである。ミルは、自然科学領域の専門的探求においても、思想と討論の自由を欠くことのできない方途として要請している。それは、科学の方法を実践する諸段階において不可避的に生じる誤りを正すためには、他者との議論が不可欠だからである。『論理学体系』第五巻で展開されるミルの誤謬論、とりわけ「観察の誤謬」に関する議論がこの解釈の裏付けとなろう。以上の考察によって、『論理学体系』から『自由論』に至るまで、ミルの哲学に一貫して通底する、人間の認識の可謬性と探求の社会的次元というテーマが明らかになるであろう。